People

ラモン・ヴァルガス
Ramón Vargas
●テノール

取材・文＝中 東生

トリノ王立歌劇場来日公演を前に ヴェルディ《仮面舞踏会》の魅力を語る

■公演情報
トリノ王立歌劇場《仮面舞踏会》〈日時〉12月1日15時、4日18時30分、7日15時〈会場〉東京文化会館〈共演〉オクサナ・ディカ、マリアンネ・コルネッティ、市原 愛（以下、声楽）、ジャナンドレア・ノセダ指揮トリノ王立歌劇場管弦楽団、同合唱団、ロレンツォ・マリアーニ（演出）、他〈問合せ〉ジャパン・アーツ 03-5774-3040 ※その他の公演については、コンサートガイドを参照

ラモン・ヴァルガスの歌うリッカルドは、このオペラの結末を観客に納得させるのに一番適しているのではないかと思われるほど、優しい。この役をレパートリーとするテノーレ・リリコ・スピントの鋼のような響きはないし、ヘルデン・テノールの、他を威圧する声量もないが、ヴェルディに必須のベルカント唱法とレガート唱法を自在に操る、正統派のヴェルディ歌いだ。それに加えて、声に一種の柔らかさとメランコリックさをも併せ持ち、自分を誇示することがない。その品格がスウェーデンの啓蒙専制君主グスタフ3世を彷彿とさせ、暗殺者となった親友を赦しながら死んでいくという高貴な魂を持ったリッカルドとして、観客に確信を与える歌い方ができるのではないか。

その彼が11月にトリノ王立歌劇場来日公演の《仮面舞踏会》でリッカルドを歌う。この公演を前に話を伺った。

――この役柄についてどうお考えですか？

ヴァルガス（以下、V） リッカルドはロマンティックな役で、モデルとなったグスタフ3世も同様の性格だと思います。それはグスタフ3世が、全ての物事を政治的に処理しなかったという歴史から読み取れます。彼は美術や音楽を愛でていたのです。

私はこの役柄が自分に合っていると思っています。歌う部分が長いという意味では、声帯にとって大変な役ですが、音楽的にはそれほど難しい役ではありません。なぜならヴェルディによって歌手に負担のかからないよう配慮されて作曲されているからです。一番大切なのはこの一種軽いようにも見えるリッカルドの人格に真実味を与えるような表現力です。なぜなら彼はオペラの最後に大変重要な進化を遂げるからです。

私が初めてこの役でデビューしたのは、98年メキシコシティにある国立文化会館での公演でした。この時の思い出は今でも大切にしています。その後様々な場所で歌ってきました。日本に行く前にはウィーン国立歌劇場でもリッカルドを歌います。私にとってはとても大切な役の1つです。

――トリノ王立歌劇場のプロダクションをどう思いますか

V 今まで伝統的なものからモダンなものまでいろいろな演出を体験してきました。現代的な演出も好きですが、物語の神髄が変えられたり、音楽的要素を尊重しないような現代演出は好きではありません。そういう意味で、このトリノの演出は程よく伝統的だと思います。

――トリノ王立歌劇場の魅力は

V トリノ王立歌劇場はとても美しい劇場です。そして、人間という存在と音楽を共存させることに成功した素晴らしい劇場です。オペラは人間を通して初めて、生き生きと輝き始めるからです。

――日本の皆様に一言お願いします

V 日本の皆様の音楽に対する理解は、ここ数年でより成熟したようにお見受けします。もうずいぶん前から定期的に皆様の前で歌っていますが、観客として公演を支えて下さる力の強さに毎回驚かされます。そして現在、日本の方々がオペラを輸入するだけではなく、自身でプロデュースするまでになったのは素晴らしいことだと思います。そんなレヴェルの高い日本の皆様にふさわしいパフォーマンスができるよう、願ってやみません。